

浜松ホトニクスホームページより引用

浜松ホトニクスの歩み

女神の前髪をつかむ者

テレビジョン技術の祖、高柳健次郎博士。10年、20年先の社会に役立つ技術を開発しようと研究

テーマを追い求めた博士の胸中には、西洋の幸運の女神“フォーチュン”の姿があったといいます。

美人で前髪がふさふさしているが、後ろの髪がない。だから彼女をつかまえるためには、こちらが

先回りして彼女が来るのを待ち、前髪をつかまなければならない。新しいものを生み出そうという

時の心持ち、それは高柳博士の技術を汲む浜松ホトニクスに脈々と受け継がれています。



左：高柳健次郎博士（1899-1990）

浜松市生まれ。教員養成所を卒業後、浜松高等工業学校（現・静岡大学工学部）助教授の時、テレビジョン研究を立志。浜松ホトニクスの創業者・堀内平八郎は、高柳研究室の門下生となった縁で、博士のテレビジョン技術と「未知未踏」に挑むスピリットを受け継ぐことになった。

右：1926年（大正15年）、高柳博士の研究チームは、世界ではじめて電子式テレビで「イ」の字を映し出すのに成功した（写真は浜松科学館の再現装置によるもの）。

光の時代に先駆けて



「イ」の字から88年。

光技術は、目覚しく進歩し、21世紀を「光の世紀」と呼ばしめるまでになりました。

浜松ホトニクスは、この華々しい光技術の進歩とともに歩んでいます。

社名の由来



昭和 30 年頃の海老塚工場

当社の旧社名は「浜松テレビ」でした。社名の由来は、堀内が師と仰ぐ高柳健次郎氏の精神と技術を受け継ぎ、光技術と産業を結び付けることを設立理念と事業目的としたため、高柳にちなんだ社名を考えることになり、当時すでに、「高柳」 = 「テレビ」という代名詞的な関係があったため、「浜松テレビ」と名付けられました。なお、この社名は、テレビ局と間違えて新人タレントが挨拶に来たり、家庭用テレビの修理を依頼されるなどの後日談を生むことになりました。

アルバイト孤軍奮闘す…



水中カメラの組み立て・調整作業

当社におけるテレビジョンの科学分野、産業分野への応用は、三重大学の川本信之教授から依頼された、魚礁観察用水中カメラの制作から始まりました。このカメラの制作は、翌春の入社を予定していた横沢文男（元監査役）がアルバイトで行いました。十分な部品や測定機器も揃わない中、4カ月に渡る孤軍奮闘の末、当社の歴史上初のテレビカメラが、一人のアルバイトの手によって完成したのです。

チャンスをつかめ！

設立から2年足らずの、まさに一介の町工場の域を出ない小規模企業であった当社にとって極めて画期的な研究が政府資金の助成を受けて行われました。当時のわが国は原子力開発の初期段階にあり、技術、装置の国産化に積極的に取り組んでいました。当社では、放射線の測定に使用するシンチレータ（蛍光体の1種で放射線の入射によって発光する透明結晶）の試作を行うことを申請しました。他の申請企業はいずれもそうそうたる顔触れで、この中で当社のテーマが認められるのか心配されましたが、結果は見事に合格！研究費になかなか予算のとれない当社にとって、絶好のチャンスとなりました。

黄色の日々



当時の CdS セル製造担当者

CdS セルは、それまで光電管などの電子管製品を扱っていた当社が、初めて手がけた半導体製品です。

開発を担当した鈴木佐喜雄は、硫化カドミウムの粉末で全身を真っ黄色にしながら、たった一人で試

行錯誤を繰り返し、製品化に成功しました。昭和 33 年の暮れのある日、テレビのブラウン管の輝度

調整用として、月 1000 個単位での注文が舞い込みました。これまで多品種少量生産を行っていた当

社にとって、初めて体験する大量生産であり、従業員を総動員して生産にあたりました。CdS セルの

開発は、半導体技術の蓄積や、全社一丸となって昼夜生産にあたることで社内の結束が高まるなど、

さまざまな成果をもたらしました。

浜松テレビ様と呼んでやるよ



最初の光電子増倍管 931A

光電子増倍管は光検出器の中で特に優れた特性をもっています。昭和 30 年初頭になると、光電子増倍管を使用した化学分析機器が作られるようになり、国内での需要も増えてきました。そのような折、ある取引先から言われた「光電子増倍管を作ったら浜松テレビ様と呼んでやるよ」との言葉が開発の必要性を痛感していた技術者を奮起させ、光電子増倍管の開発に着手しました。さまざまな困難を克服して開発された光電子増倍管は、他社を凌駕する性能を持っており、この製品によって、当社は光技術企業として基盤を固めることになりました。

浜松ホトニクス歩みに戻る

1960 年代